

小学校図画工作の基礎—造形的な見方や考え方を働かせる学び

目次

まえがき……3

目次……4～7

第1章 造形教育の目的と内容 ……9

1. 造形を学ぶねらい—美術教育に生かす [樋口一成]……10～15
 2. 幼小接続—学びの連続・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 [樋口一成]……16～17
 3. 表現活動と鑑賞活動（えがく・つくる・みる活動）の内容と方法 [西園政史]……18～21
 4. 他教科との連携による造形教育 [高橋智子]……22～23
 5. 子どもの表現と大学での実技体験 [西尾正寛]……24～25
- コラム1 図工・美術科の魅力～楽しさを伝える楽しい表し方～ [松崎としよ]……26

第2章 絵画 ……27

1. 絵具の仕組みと特徴 [桶田洋明]……28～29
 2. 見て描く①—サカナを描く [関 俊一]……30～31
 3. 見て描く②—風景、自然等 [石崎誠和]……32～33
 4. 見て描く③—自画像 [桶田洋明]……34～35
 5. 見て描く④—観察画 パイナップル先生 [石崎誠和]……36～37
 6. 思いを描く—心象表現 [角地佳子]……38～39
 7. 抽象的に描く①—形や色を探る [渡邊美香]……40～41
 8. 抽象的・装飾的に描く②—技法を使って [角地佳子]……42～43
 9. 絵画の材料・技法①—鉛筆等による描写 [佐藤昌宏]……44～45
 10. 絵画の材料・技法②—水彩画 [渡邊美香]……46～47
 11. 絵画の材料・技法③—アクリル表現 [桶田洋明]……48～49
 12. 絵画の材料・技法④—クレヨン・パス・コンテの表現 [西園政史]……50～51
 13. 絵画の材料・技法⑤—油彩の表現(1) プリマ技法 [桶田洋明]……52～53
 14. 絵画の材料・技法⑥—油彩の表現(2) グリザイユとグレージングによる効果 [関 俊一]……54～55
 15. 絵画の材料・技法⑦—油彩の表現(3) ミクストメディアの表現、実践例 [関 俊一]……56～57
 16. 絵画の材料・技法⑧—日本画の表現 [石崎誠和]……58～59
 17. 絵画の材料・技法⑨—墨の表現「基礎編」[松崎としよ]……60～63
 18. 絵画の材料・技法⑩—墨の表現「発展編」[松崎としよ]……64～67
- コラム2 形や色の冒険 [石崎誠和]……68

第3章 版画 ……69

1. 版を用いた表現①—いろいろな版について [山本辰典]……70～71
 2. 版を用いた表現②—紙の版「紙を切る・貼る・刷る」[加藤克俊]……72～73
 3. 版を用いた表現③—木版画の技法 [西園政史]……74～75
 4. 版を用いた表現④—スチレン版画 [新實広記]……76～77
- コラム3 自分の作品にエディションナンバーとサイン、タイトルを書こう [山本辰典]……78

第4章 彫刻 ……79

1. 彫刻の材料・技法①—土、モデリングとカービング等 [奥田真澄]……80～81
 2. 彫刻の材料・技法②—木・石と材料・用具・基本技法 [河西栄二]……82～83
 3. 彫刻の材料・技法③—多様な材料、表現の方法 [徳安和博]……84～85
 4. 具象彫刻①—手や顔の表現、野菜や果物の表現等 [徳安和博]……86～87
 5. 具象彫刻②—人体の表現、動物の表現等 [徳安和博]……88～89
 6. 抽象彫刻—思う形・感じる形 [永江智尚]……90～91
 7. 環境彫刻—野外彫刻の活用、パブリックアートを提案してみよう！ [加藤可奈衛]……92～93
 8. 土で表現する—人物、動物のテラコッタ等 [奥田真澄]……94～95
 9. 木を彫る—木彫の表現 実践例「鳥をつくる」[河西栄二]……96～97
 10. 彫刻・レリーフ—凹凸で表す 塊や質感の表現、実践例 [河西栄二]……98～99
 11. 石を削る—石彫 [加藤可奈衛]……100～101
 12. 石膏でつくる—型取り [奥田真澄]……102～103
- コラム4 塑造の楽しみ [徳安和博]……104

第5章 デザイン・映像メディア表現 ……105

1. 木材を用いた形の発見 [加藤克俊]……106～107
2. カタチがうつる・カタチをうつす [吉田悦治]……108～109
3. 衣装のデザインと制作「変身しよう」—様々な材料でつくる [本田郁子]……110～111
4. 発想をかたちに—絵やイラストとして表現する [西村志磨]……112～113
5. 生きもののフォントをつくろう—イラスト文字をデザイン [山本政幸]……114～115
6. 美しく楽しく示す—マーク等 [岡田博明]……116～117
7. 目のトリック—トリック・アートの世界 [栗山裕至]……118～119
8. ポスターやリーフレット—表現のポイント [石井宏一]……120～121
9. 立体構成 [石井宏一]……122～123
10. 部屋を天井から見よう—一点透視の遠近法 [山本政幸]……124～125

- 11. 色みつけー色彩の基礎、色遊び、配色等 [小江和樹]……126～127
 - 12. モダンテクニックとその活用 [新實広記]……128～129
 - 13. モダンテクニックを活用した紙芝居づくり [新實広記]……130～131
 - 14. 写真の表現ーカメラの撮影方法、写真表現の鑑賞 [三橋純予]……132～133
 - 15. マンガ・イラスト的表現 [小江和樹]……134～135
 - 16. 手づくりのアニメーションーコマ撮りで写真を動かす [山本政幸]……136～137
 - 17. アニメーション・動画の表現 [小江和樹]……138～139
 - 18. コンピュータの活用 [石井宏一]……140～141
- コラム5 デザインのこころ [石井宏一]……142

第6章 工作・工芸 ……143

- 1. 新聞紙やチラシでつくるー立体造形作品とファッションショー [樋口一成]……144～145
 - 2. 紙でつくる①ー切る・折る・組み合わせる活動 [鈴木安由美]……146～147
 - 3. 紙でつくる②ーポップアップカード作り [樋口一成]……148～153
 - 4. 紙でつくる③ー紙紐と和紙で作る ランプシェード [樋口一成]……154～155
 - 5. 木の魅力と素材としての特徴 [谷 誉志雄]……156～159
 - 6. 木工の道具①ーのこぎりで木を切る [谷 誉志雄]……160～163
 - 7. 木工の道具②ーげんのうでくぎをうつ [谷 誉志雄]……164～165
 - 8. 木でつくる①ー発想を生かした木の造形 (木製パズル) [鈴木安由美]……166～167
 - 9. 木でつくる②ーおもちゃ、木工の広がり [樋口一成]……168～169
 - 10. 木でつくる③ー枝や葉、木の実で動物をつくろう [隼瀬大輔]……170～171
 - 11. 木でつくる④ー寄木でペーパーナイフをつくろう [隼瀬大輔]……172～173
 - 12. 軽く、柔らかい材料でつくるーポリエチレンの袋やテープ [西尾正寛]……174～175
 - 13. 織物ー自作の機 (はた) で布を織る [浅海真弓]……176～177
 - 14. 仮面を作る [佐藤昌宏]……178～179
 - 15. 陶芸の魅力ー粘土 (陶土) から焼き物への道程 [菅野弘之]……180～181
 - 16. 土でつくるー陶芸の基本、手順や注意点 [菅野弘之]……182～183
 - 17. 飾りをつくるー七宝焼き・レジン制作 [江村和彦]……184～185
 - 18. モザイクで表す [新實広記]……186～187
 - 19. 金属工芸の教材としての可能性について [古瀬政弘]……188～189
 - 20. 金属でつくる①ー鍛造によるカトラリー制作 [古瀬政弘]……190
 - 21. 金属でつくる②ー打ち出しによるブローチ制作 [古瀬政弘]……191
 - 22. 金属でつくる③ーアルミ板を用いての打ち込み象嵌による加飾制作 [古瀬政弘]……192～193
- コラム6 材料を捉える視線 [西尾正寛]……194

第7章 鑑賞 ……195

- 1. みる活動ーいろいろな鑑賞活動ー作品をみることで育つもの [西園政史・奥村高明]……196～197
 - 2. 感じることから、始まる鑑賞ー感じて みて 言葉にする [杉林英彦]……198～199
 - 3. 現代美術の意図を探る [渡邊美香]……200～201
 - 4. 美術鑑賞学習の方法について [栗山裕至]……202～203
 - 5. 「みる」から「つくる」へー日常体験の気づきから価値を創発する [岡本真由子]……204～205
 - 6. 体験的な鑑賞ー模写的な制作を通して [佐藤昌宏]……206～207
 - 7. 手で触れることによってー美術作品の触覚的な鑑賞体験 [山本辰典]……208～209
- コラム7 みる活動のすすめ [三橋純予]……210

第8章 社会への広がり ……211

- 1. 美術館の活用①ー鑑賞教育 [三橋純予]……212～213
 - 2. 美術館の活用② [浅海真弓]……214～215
 - 3. ものづくり教室ー陶芸教室等の実践例 [浅海真弓]……216～217
 - 4. アートによる交流ー地域との連携、作家とのコラボレーション [三橋純予]……218～219
 - 5. 地域の特徴を生かすー地域の文化、伝統、自然、人材の活用 [浅海真弓]……220～221
 - 6. 地域にひろがる創造の種 [吉田悦治]……222～223
- コラム8 アートフェスは、人・街の気づき装置 [岡本真由子] ……224

参考文献……225～226

執筆者紹介……227

※本書では、それぞれをご専門とする各先生のお考えに沿って見開き單元ごとに構成しています。そのため、一部教材や用具、また、漢字や平仮名等の表記が節などにより異なる場合がございますこと、ご承知ください。

造形教育の目的と内容

子どもたちは、描いたりつくったりする中で、自らもっている資質や能力を伸ばし、視覚や触覚などの様々な感覚を働かせながら、形、色、イメージを捉えていく。そして、それらを基にして、考えたり、想像したり、計画を立てたりしながら作品をつくり上げていくとともに、周囲の人々や社会と交流していくことができる。このような過程を通して、思い通りのものや思っていた以上のものをつくり上げた時、ものをつくり出す喜びを味わうことができる。また、自分や友達が制作した作品や、日本・世界の美術作品などを鑑賞する中で、美しいものや優れたものに気づいたり感動したりする。鑑賞によって得られた知識や経験は、その後の描いたりつくったりする活動につながっていく。描いたりつくったり、鑑賞したりすることを通して培われた思考力・想像力・創造力・発想力・豊かな情操は、他教科の学習だけでなく子どもたちの生活に大きな影響を与えるとともに、豊かな人間性を育み、よりよい人生を歩んでいくための基礎となる。

図画工作科の目標は、子どもたち自身に本来備わっている資質・能力を一層伸ばし、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す観点に立っている。それは、どのような力なのだろうか。



図1. 紙のお面づくりを楽しむ子ども

1. 対象や事象を捉える造形的な視点について子ども自身の感覚や行為を通して理解する

子どもたちは、一人ひとりよさや個性、可能性をもっている。造形教育では、子どもたちが本来もっているよさや個性を発揮し、可能性を伸ばすことを目指している。子どもたちが描いたりつくったり、いろいろな作品を見たりする行為を通して、子どもたちは造形的な感覚や造形活動に必要な知識や技術を自ら獲得していく。それらの経験をさらに積んでいくことによって、子どもたち自身の中に造形活動に必要な対象や事象を捉えるための見方や力が備わっていく。

大人の見方や考え方に引き込み過ぎることなく、また過剰な指導をし過ぎることなく、子どもたちの今の姿をよく見て理解し、子どもたちの本来もっているものや学び取っていく力を信じて、子どもたち一人ひとりのよさや個性を大切に、可能性をさらに伸ばしていきたい。

2. 素材体験を重ねる

紙でものをつくろうとする時、材料である紙の特徴を知っておくことはとても大切なことである。紙を切ったり折ったりするとどのような形に変化するのか、また紙に曲げ癖をつけるにはどのようにすればよいかなど、材料そのものや材料の加工に関する知識を多くもっていればいるほど、制作する前に、つくり上げようとする作品のイメージをしっかりともちことができ、また制作の計画もしっかりと立てることができる。

この材料に関する知識をもつためには、その材料を実際に扱うことが大切であり、さらにその体験をできるだけ多く重ねることで材料に関する知識をより多く得ることができる。

3. 材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくり表す

木で作品をつくろうとする時、木という材料を加工する用具と、その用具によってどのような加工ができるかといった知識をもっておくことは大切なことである。さらに、木を鋸で切る時には、木の材種・硬いか軟らかいか、節の有るか無いか、また木目の方向はどうかなどといった木という材料の状態を見極めることができ、その状態に応じた適切な用具を用いたり用具の使い方を変えたりすることができれば、効率よくきれいに加工することができ、けがなどを避けることもできる。

材料を加工する用具をよく理解したり、材料に関する知識を増やしたりするためには、用具を使用する機会を数多く経験し、体験的に学ぶことが近道である。材料や用具を使って、制作する経験を積みながら、表現する中で子どもたち自身が工夫を重ねていくことによって、創造的につくり表したりすることができるようになっていく。



図2. 漆喰(しっくい) だんごづくりを通して新しい素材を体験する。



図3. フェルトを専用の針(ニードル)で刺す制作を通して、用具の使用を体験的に学ぶ。

4. 手の巧緻性を育てる

作品を制作することが苦手な人は、比較的制作することを避ける傾向にある。作品を制作する経験が少なく、材料を手にした手を使って材料を加工したりする経験が少なければ、手の巧緻性を十分に育てることができず、いつまでも制作することが苦手な状況が続いていくことになる。カナ

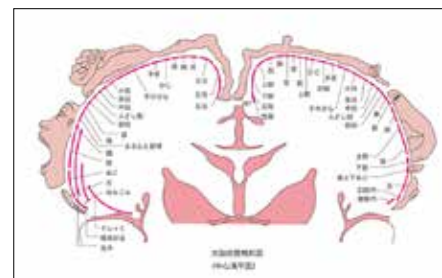


図4. ペンフィールドが表した脳の分断図イメージ
(イラスト作成：彩考／PIXTA〈ピクスタ〉)

ダの脳神経外科医であるワイルダー・グレイヴス・ペンフィールド(1891～1976年)が考案した「ホムンクルス人形」や「ホムンクルス人形の平面図」を見ると、感覚野と運動野のどちらも人の大脳皮質と手・唇・口が太く結びついていて、大脳において大きな割合を占めていることがわかる。手と脳はつながっているといわれる所以でもある。

子どもが材料や用具を手にして造形活動を行うことは、脳にも好影響を与えている。子どもにとっては、幼少期から造形活動を通して、手を使うことがとても大切であるといえる。

5. 用具等を整理する習慣を身につける

造形活動には、材料や用具を数多く使用する場面がある。必要なものだけを机などの上に出し、制作するための場所をできるだけ広く確保し、制作した後は、次に制作する時のために材料や用具を元のあったところに片づけて整理するとともに、制作した作品を指示された場所に置くという習慣を身につけたい。決めた通りに、また、指示された通りに材料や用具をきれいに整理する習慣を身につけるといことは、他の教科の学びにもつながっていると同時に、子どもたちの普段の暮らしにもつながっている。



図5. 用具の整理整頓を行う。

6. 工夫したり発想したりして作品をつくる中で自分の見方や感じ方を深める

材料や用具に関する知識や技術を生かして、子どもたち自らが工夫したり発想したりすることによって材料や用具を独自の方法で用いたり実験的に試したりする行為の中から、思いがけない表現が生まれ、子どもたちの中に経験として残る。材料や用具に関する内容や制作のための技術について、子どもたちに伝えたり指導したりすることが必要な内容もあるが、子どもたち自身で発想したり工夫したり、さらには実験したり失敗したりというように、試行錯誤しながら試したり経験したりできる場面をしっかりと確保したい。子どもたち自身が考えて制作する中で、造形的なよさや美しさについて自分ならではの感じ方ができるようになるとともに、表したいことや表し方についても子どもたちが自分自身で決定することができる力が養われる。

このような子どもたち自身の中から生まれる造形に関する感じ方や考え方、思いは、子どもたちが創造的に発想したり構想したり、また作品などに対する自分自身の見方や感じ方を深めたりすることにつながっていく。

7. 想像力を養う

造形活動では、想像力を働かせて色、形、動きなどを予想しなければならない場合がある。そして、材料の硬さや軟らかさを予想した上で加工の環境や用具を選択したり、構造や強度を予想した上でいくつかのものを接着したり組み上げていったりするように、思った作品を制作していくため



図6. たくさんの木片を使って木の車を制作する中で、想像力や創造力を養う。

1) ジョイ・ポール・ギルフォード (1897～1987)

アメリカの心理学者。因子分析法を用いて知能、適性、向性、人格などを研究した。特に知能について情報の内容、所産、心理的な操作の三次元で構成された120の因子を考え出し、矢田部-ギルフォード検査の基礎となった。



図7. 材料を組み合わせる中で、制作するものを検討して決定する力を養う。



図8. 材料を手で触れている試みで観察力を養う。

には、想像力をしっかり働かせて予想を繰り返しながら制作を進めていく。この造形活動の中で必要な想像力や予想する能力を養うためには、いろいろな材料や用具を手にして実際に造形活動を行うことや、普段の暮らしの中においても身のまわりにあるいろいろなものに興味をもって見たり触れたりすることなどが大切である。また、実際にはないものを想像したり、空想の世界を想像したりすることも大切なことといえる。

8. 創造力を養う

人間の思考について研究を行ったアメリカの心理学者ジョイ・ポール・ギルフォード¹⁾によると、人間の思考には収束的思考と拡散的（発散的）思考という二つの側面があるという。収束的思考は、既知の情報から論理的に思考や推論を進めていって唯一の正解に正しくそして早く到達するための思考であり、拡散的思考は、既知の情報から様々な考えを幅広く巡らせていって新たなものを生み出していく思考である。

造形活動においては、どちらも重要であり必要な思考であるが、新しいものをつくり出すためには拡散的思考の能力が不可欠である。拡散的思考を行うにあたっては、様々な幅広く考えを巡らせることができるように、できるだけ多くのいろいろな情報を獲得しておく必要がある。造形活動に直接関係ないであろうと思われる情報や経験の中にも子どもたちが獲得しておくべきことが含まれているかもしれない。造形活動はいうまでもないが、子どもたちには豊富な経験ができる環境がとても大切であるといえる。

9. 決断力を養う

造形活動を行う中では、何かを選択したり決定したりすることが繰り返される。例えば、制作しやすい環境を整えたり、用いる材料や用具を考えたりする時に、いろいろな環境、材料、用具の中から最適なものを選択して決定する。それぞれの工程の途中では、次にどのような工程に進んでいくのかといったことを選択して決定していく。このような選択して決定していく際の決断力には、それまでの経験が大きく影響する。

いろいろな経験の中でも決断しなければならないことと同じ経験や似た経験を数多くしていれば自信をもって決断することができるが、まったく経験のない初めてのことを決断する場合にはなかなか自信をもって決断することは難しい。決断力を養うためにも、造形活動を含めた数多くの経験を積んでおく必要があるといえる。

10. 観察力を養う

造形活動では、いろいろなものを見る機会が多い。材料を見る目、制作途中に作品を見る目、加工の良し悪しを見る目、思ったように作品をつかっていくことができるかを見極める目、でき上がった作品を確認する目、自分の作品と仲間の作品を見る目や見比べる目など、造形活動を通じてものを見る目である観察力が養われる。

この観察力とは、全体と部分を、また構造、均衡、強度、仕組み、動きなどを見る力、見極める力、見比べる力である。見る力、見極める力、見比べる力といった観察力を養うためにも、子どもたちには普段から興味や関心をもっていろいろなものをしっかり見る習慣を身につけてほしい。



図9. みんなでつくり上げた段ボールカーを見ながら制作を振り返っているところ。



図10. 自分たちでつくった車に乗って喜びを味わう。

2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作科編』日本文教出版、平成30年、p.9



図11. フェルトの小さな動物づくりを通して集中力を養う。

11. 説明する力を養う

造形活動を通して、子どもたちには作品づくりだけでなく、自らの作品や制作の意図を説明したりつくり上げた作品について説明したりする力も養ってほしい。この説明する行為は、相手が何を聞きたいと思っているのか、相手がどこまで理解してくれたのかといった相手を理解することや思いやることを学ぶ機会となる。同時に、自分の制作や作品について相手にわかってもらうためにはどのように説明するとわかりやすいかといったことについても経験を重ねながら学んでいく機会ともなる。

このような学びを通して、子どもたち同士が相互に理解し合うための方法やその力を身につけることは、造形活動だけに留まるものではなく、多くの子どもたちの学びやその後の暮らし全般に大きく影響する。

12. 学びに向かう力、人間性等を培う

ここでいう「学びに向かう力、人間性等」とは、図画工作科の教科の目標である「つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。」²⁾を示している。

幼い子どもたちは目の前に現れた点や線に興味を示すことから始まって、次第に自ら描きたいものを描き始める。紙などの上に点や線が現れることに喜びを見だして点や線を何度も描いているうちに、心身の成長とともに描きたいものを描くことができるようになっていく。描きたいものを描くことができるようになると、何かを描くことに喜びを感じるようになっていく。さらに自ら描いたものに満足したり描いたものを褒められたりすると、その喜びがより一層大きなものとなる。その一方で、子どもたちは周囲と比べられたり、また思うように制作できなくなったりする状況下におかれると、ものをつくり出すことに喜びを感じられなくなったり嫌になったりする。子どもたちがものをつくり出す喜びを味わいながら、自ら楽しく積極的に造形活動ができる環境をしっかりと確保したい。

子どもたちがものをつくり出す喜びを味わいながら積極的に造形活動を行う中で、知性と感性がともに育まれ、さらに知性と感性を融合させながら対象や事象を捉えることができるようになる。その結果として、楽しく豊かな生活を創造しようしたり美しいものを取り入れようしたりする態度が生まれる。このような一連の流れを経て、子どもたちは豊かな情操を培うことができるようになる。

13. 主体的で積極的な姿勢を育てるとともに集中力を養う

子どもたちは、自らが想ったり考えたりした方法や内容にしたがって造形活動を行う。子どもたちは自らの想いや考えを叶えることができる場を与えられると、造形活動に集中して取り組む。さらに喜びを感じながら継続してものをつくり出していくことによって、様々な方法や技能を身につけながらものをつくり上げることができるようになり、つくり出していく行為そのものをさらに続けていきたいと思うようになる。

このように造形活動を通じて育つ主体的で積極的な姿勢と、それとともに養われる集中力は、子どもたちの造形活動面だけではなく、多くの学びや暮らしの中でも生かされていくものであり、大切に育てていかなければ



図12. 面ファスナーでつくった絵の制作を通して、一人ひとりの個性やよさを伸ばす。



図13. 大勢で制作する活動を通して協働性や柔軟性を養う。



図14. 大きな作品を計画してつくり上げる。

ならないものである。

14. 子どもたち一人ひとりの個性やよさを伸ばす

造形教育を通して、子どもたちがもっている個性やよさを伸ばしていきたい。そのためには、子どもたちの成長に応じて、また現状をしっかりと把握した上で、個性やよさを伸ばすことができる教育内容、扱う材料や用具といった物質的な環境、教師や仲間といった人間的なつながり、造形活動を行う十分な時間などを確保する必要がある。

しかし現状では、子どもたち一人ひとりの個性やよさを引き出し切れずに、同じような作品が数多くつくられている光景が見られたり、指導者の考えが優先されたりする状況も生れている。また、現在のように制限が多くて限られた環境下では、材料や用具を十分に確保することが難しく、さらにゆっくり時間をかけて一人ひとりをしっかりと把握し、個々に合った造形教育を進めることが難しい状況も見られる。今こそ、基本に立ち返って子どもたち一人ひとりが個性を十分に発揮することができ、子どもたちのよさを思う存分伸ばしていくことができる環境づくりを心掛けたい。

15. 協働性・柔軟性を養う

一人で造形活動を行う中で自ら望むものをつくり上げた時の喜びは大きいものであるが、その一方で、仲間と協力してみんなの意見をまとめながら作品をつくり上げた時の喜びも大きいものである。さらには、その喜びをみんなで分かち合えるという良さもある。子どもたちは、みんなで作品をつくり上げる造形活動を通して、相手のことを思って自分とは異なった意見を受け入れることであったり、また相手のことを思いながらも自分の意見をしっかりと相手に伝えていくことであったりという経験を得ながら、仲間との間での協働性や柔軟性を養っていく。

これらの協働性や柔軟性は、子どもたちの造形活動面だけでなく、子どもたちの学びや暮らしの様々な場面で出会う人々との関係づくりに大きな影響を与えることから、造形活動を通してしっかり養っていききたい。

16. 計画する力、実行する力を養う

造形活動には、計画する能力が必要な場合がある。つくろうとするものに合った材料や用具をどこからいつまでに用意し、どのような工程でつくるのか、また今日はここまでつくってその後は明日にしようなどと考える力である。最善の計画を立てて、しっかりと準備をし、計画通りに制作していくことによって、目標通りに正確に制作することができるようになる。

このような計画する力や実行する力は、造形活動だけでなく子どもたちの学びや暮らしの多くの場面でも大切な力となる。造形活動をする中で、しっかり養っていききたい。

17. 試行錯誤しながら問題を解決する能力を養う

造形活動を行っていると、多くの試行錯誤する機会に恵まれる。また、失敗をしてもそれを乗り越えていく機会にも恵まれる。このように試行錯誤したり、失敗して乗り越えていったりすることによって、最初に思ってもいなかった作品づくりができたり、想像し得なかった作品をつくり上げることができたりするようになる。制作者本人が最初に想像し得なかった



図15. 用意された木の材料を組み合わせる中で、試行錯誤しながら作品をつくり上げる。



図16. 火を使うなどの制作を通して、危険を察知して回避する能力を養う。



図17. 和紙の折り染めの制作体験を通して、和紙や染めの伝統と文化を理解する。

作品に到達するためには、造形活動の途中で、常にこれでいいのだろうかという思いを抱くこと、課題を発見しようとする、発見した課題を乗り越えよう克服しようとする、失敗しても諦めないこと、自分の力を把握して何ができるのか何をすべきかを考えられることなどが必要であるといえる。これらの経験を数多く積むことによって、制作の途中で上手くいかなかったり失敗したりしても、それらを何としてでも乗り越えようとする意欲をもつことにつながっていき、さらにそのことが問題解決能力を養っていくことにつながっていく。

18. 危険を察知して回避する能力を養う

制作時に材料を加工するための用具や機械を用いていると危険な場面に遭遇することがある。この危険に前もって気づいたり、早めに察知して回避したりすることは、とても大切なことである。何が危険であるのかと理解して、これから危険なことに遭遇するかもしれないと予想できるためには、先述の集中力を養うこと、素材体験を重ねること、用具の使用を体験的に学ぶこと、手の巧緻性を育てること、計画する力を養うこと、想像力を養うことなどが深く関わっている。造形活動を数多く体験する中で、危険を察知して回避することができるようになり、安全で楽しく作品をつくり上げることができたという経験を少しでも多く積んでほしい。

19. 伝統や文化を理解する

子どもたちは、家庭、学校、地域社会など様々な集団や社会の中で暮らしている。子どもたちが暮らしている家庭、学校、地域社会、さらに自国や郷土を深く理解して愛するために、自分の住む地域や自国の伝統や文化に関心をもって学び、正しく理解することはとても大切なことである。同時に、他国の伝統や文化についても知識を深めて理解し、他国を尊重し、国際社会の平和や発展に寄与する態度を養うことも重要であるということが、教育基本法の中で教育の目標としても示されている。そのための具体的な学びの一つが造形することや美術作品を見ることである。美術教育を通じて国際理解が成され、国際平和につながっていくことは、ハーバート・リード（1893～1963年）やトマス・マンロー（1897～1974年）によって示唆され、その考え方は現在にもつながっている。鑑賞を通して、作品や作家の名前を覚えることも必要ではあるが、作品の特徴に気づいたり、作家がなぜそのような作品を制作したのかといった制作の背景を考えたりすること、また例えば一つの工芸品を見て、その工芸品がつくられた歴史をたどったり、技法を追体験したりすることにより、自国や他国の伝統や文化の理解を深めて、正しく理解することはとても大切なことである。

図画工作科では、子ども自身に本来備わっている資質・能力を一層伸ばし、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを目指している³⁾。子どもは、その過程で本節で取り上げた多くの力や姿勢を獲得していくことで、積極的に他者や社会、世界と関わっていくことができ、よりよい人生をつくり上げていくことができるようになる。〔樋口一成〕

3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作科編』日本文教出版、平成30年、p.10

6. 思いを描く ―心象表現

「不思議な世界」「不思議な生物」という言葉をキーワードに、自分の心に浮かぶイメージを自由に表現する。また「不思議」な形や色を友達と話し合い、自分の思いを伝え合う。パスの簡単な技法を知り、効果的に使うことでより自分の表現に近づけることができる。

1. 実践のねらい

- ①「不思議」という抽象的な言葉のイメージについて友達と話し合い、自分なりに「不思議」な形や色を想像する。
- ②パスの技法を知り、試してみたい技法をいろいろ使って「不思議な世界」「不思議な生物」を表現する。
- ③「不思議な世界」「不思議な生物」について感じたこと、考えたことを自由に表現する。

2. 準備するもの

- 画用紙1/8切サイズ、1/16切サイズ
- パス(16色)
- 割り箸・竹串…スクラッチ技法の際、太さを変えて削るために使う。
- ペインティングナイフ…スクラッチ技法の際、全体的に削るために使う。
- ティッシュ…絵具をぼかすために使う。
- ハサミ、のり

3. 実践の流れ

- (1)「不思議」という言葉、「不思議な世界」「不思議な生物」について話し合う。
「不思議」という言葉はどんな色を想像するか、どんな形を想像するか話し合う。また「不思議な世界」はどんなイメージかという質問に対して「宇宙」「虹色の世界」「暗闇」「海の底」など様々な答えが返ってくる。
同様に、そこに生きる「不思議な生物」についても質問し、「宇宙人」「フワフワした形の生き物」「微生物」「深海魚」など自由に発想して作品のイメージを広げる。

(2)パスの技法を知る

ぼかし技法やスクラッチを主に使って表現する。

- 重ね塗り…色を重ねて塗り、指やティッシュでこすると色が混ざって見える(図1)。
- 薄塗り…色を軽く塗り、塗ったところを指やティッシュでこすると淡い色になる(図2)。
- 線ぼかし…描いた線を指やティッシュを使ってぼかす(図3)。
- 面ぼかし…塗り込んだ面を指やティッシュを使ってぼかす(図4)。
- 内ぼかし…形を切り抜き、外枠の周りにパスを塗って指やティッシュを使ってぼかす(図5)。
- 外ぼかし…形を切り抜き、切り抜いた形のまわりにパスを塗って、指やティッシュを使ってぼかす(図6)。
- スクラッチ…赤、黄、橙、黄緑などの明るい色をしっかりと塗り込み、



図1. 重ね塗り



図2. 薄塗り



図3. 線ぼかし



図4. 面ぼかし



図5. 内ぼかし(葉、花弁)



図6. 外ぼかし(光の環)



図7. スクラッチ



図8. 線ぼかしと面ぼかし図



図9. 線ぼかしとスクラッチ



図10. 面ぼかしとスクラッチ



図11. 内ぼかしとスクラッチ



図12. 内、外ぼかしとスクラッチ

その上に黒、茶などの暗い色を重ねて塗る。竹串などで重ねて削ると下の色が見え、削る楽しさも味わえる(図7)。

これらの技法を合わせて使うことで、より効果的な画面が描けることを知る。やり方がわからない時は、小さな紙でいろいろな技法を確かめる。

(3)描く

「不思議な世界」1/8切画用紙、「不思議な生物」1/8切画用紙のどちらから描いてもよい。ただしどちらか、もしくは両方にパスの技法を使用する。何も思いつかない場合は、パスの技法を1/16切画用紙に試し、「不思議な世界」をつくる。描き進む中で「不思議な世界」に「不思議な生物」ののりで貼る位置を決める。その際、すでにパスで描き込んでいれば、ペインティングナイフでパスを削り取るとのりがつきやすい。また、不思議な生物が一つでなく複数いても構わない。

「不思議な生物」を貼った後、さらにパスで描き込み、自分のイメージを広げる(図8～12)。

(4)友達の作品を鑑賞する

でき上がった作品を黒板や壁面に貼り、自分や友達の工夫やよさを発表する。その際、どのような技法を使って描いているか、「不思議な世界」「不思議な生物」を表現するためにどのような工夫をしているかを考える。

4. 実践の振り返り

- 自分の心に浮かぶイメージを、パスの技法を使うことによって表現できたか。
- 「不思議」という言葉がもつイメージを友達と共有できたか。
- 楽しんで活動に取り組めたか。

5. まとめ

「不思議」という言葉のイメージについて考え、それが個々に異なることを理解し、心に浮かぶイメージを形や色で表現する楽しさが十分に伝わる活動になった。また、パスの簡単な技法を使うことにより、絵具で描くような重厚な表現を、短時間で効果的に演出できた。一枚の画用紙に何度も重ねて描けるため、それぞれの思いを十分に引き出して満足いく作品になった。

[角地佳子]

4. 版を用いた表現④—スチレン版画

版画の活動では、技法の種類やつくり方を覚えるだけではなく、写し取る喜びを味わうことを大切にしたい。特定の題材をもって版づくりに望むだけではなく、様々な素材を版にして写し取る遊びの中で思わぬ形や色を発見し、素材の特性を感じながらイメージを膨らませる活動にしたい。本節で取り上げるスチレン版画は、版に使用するスチレンボードが木版画などとは異なり軟らかく、簡単に版をつくることができるため、すぐに版表現の楽しさを味わうことが可能である。

1. 実践のねらい

- ①素材の特性を理解して、版づくりや刷りを楽しむ。
- ②様々な方法で型押しし、形や色の面白さを発見する。
- ③刷り上がりを予想したり、刷り上がったものから想像を広げたりする。

2. 準備するもの

- ・スチレンボード
- ・ハサミ
- ・ローラー
- ・筆
- ・バレン
- ・刷り取り紙
- ・インク…簡単に洗い流せる水性インク
- ・描く素材…油性ペン（インクでスチレンを溶かす）・鉛筆・釘・ニードル・竹串・ドライバー（ひっかいて描く）
- ・型押しに使える素材…料理用各種型押し・ピンなど各種ふた・洗濯バサミなど各種プラスチック製品・ビー玉等

3. 実践の流れ

(1)描く

先の尖った鉛筆や釘などで、線や跡をつけて絵を描く。油性ペンの油性インクはスチレンを溶かして跡になり、同じ効果が得られる（図1、2）。

(2)型押し

いろいろな材料や用具を使ってスチレンに跡をつけて型押しする（図3）。(1)と組み合わせて、様々な模様をつくり出そう。

(3)版に着色する

筆やスポンジローラーで刷りたい色の水性インクをスチレンボードにつける（図4）。耐水性のスチレンボードはインクを吸い込まないので少量つけばよく、また、水性インクは簡単に洗い流せるので、何度もいろいろな色の版を刷ることができる。

(4)版を刷る

刷り取り紙を版の上に重ねてバレンでこすり、版を刷る（図5、6）。



図5. 刷り取ったスチレン版画



図6. いろいろな色を塗って刷った版画



図1. 尖ったもので描いた跡



図2. 油性ペンで描いた跡



図3. 型押し

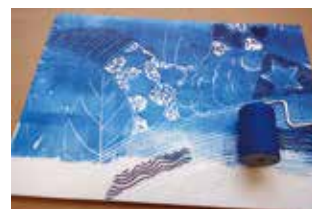


図4. ローラーで着色する。

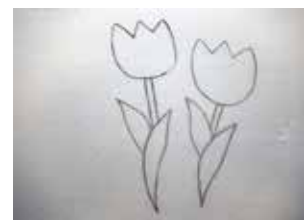


図7. 多色刷りの原版

(5)多色刷り版画をつくる

- ①版の図柄の形に沿って、ハサミやカッターナイフを使って切り抜く（図7、8）。切り抜く時は、カッターマットを使用し、スチレン版画をしっかりと押えて手を切らないようにゆっくりと切る。
- ②切り出したそれぞれのパーツに異なる色の版画インクをつける（図9）。



図8. 切り出した各版



図9. 各版に色を塗る。

- ③色をつけたらそれぞれのパーツを元の版の形に戻す（図10）。(4)と同様に版を刷る。この時、切り取ったパーツがずれないようにバレンでしっかりと押しつけながら刷る（図11）。

- ④③でパーツを元の版とは別の形に構成したり、色のつけ方を工夫したりしてみることもできる。



図10. 各版を原版に戻したところ



図11. 刷り取った多色版画

4. 実践の振り返り

- ・様々な素材を用いて版づくりを工夫し、形・色を発見できたか。
- ・素材の特性を理解し、版づくりをすることができたか。
- ・刷り上がった形や色から、新たに連想するイメージを膨らませることができたか。

5. まとめ

スチレンボードは軟らかいため、身近にある素材の形や特性を生かして線や跡をつけて絵を描いたり、ハサミやカッターナイフで版を切り分けたりして、多色刷りも容易に挑戦することができる。さらに、スチレン版画の版製作で使用した瓶のふたやクッキーの型押しなどに直接インクをつけて版にするスタンプングも、スチレン版画に合わせて楽しみたい。何度でも刷ることができる版の特性と、容易に版ができるスチレン版画の利点を生かし、写す前の想像と、写し出された形や色から想像を膨らませるなどして、版画の写す喜びを味わいたい。

〔新實広記〕



図12. 直接インクをつけて版にしたスタンプング



図13. スチレン版画を使って制作したカレンダー

4. 紙でつくる③—紙紐と和紙で作る ランプシェード

トイレットペーパー・障子紙・コピー用紙・和紙などの紙は、我々が日々の暮らしの中でよく目にするモノである。私たちは紙と聞くと、薄くて軽い平面状のモノを想像することが多いが、和紙を燃^よった“こより”などの紐状の紙を使って、紙を綴じたり袋状の物の口を閉じたりすることは、古くから行われてきた。最近では、太さ2mm程度の紙紐がホームセンターなどで販売されており、容易に購入することができるようになってきたことから、ここでは、紙紐を使った教材をご紹介します。

1. 実践のねらい

- ①紙紐という紐状の素材を上手に用いることによって、立体作品を制作することができるということを知る。
- ②紐状の素材で作る作品を日々の生活で使うことができるということを知る。

2. 準備するもの

- ・紙紐
- ・和紙
- ・牛乳パック
- ・ラップ
- ・新聞紙
- ・木工用ボンド
- ・容器（木工用ボンドを水で溶いた薄め液を入れるもの）
- ・ハサミ
- ・太い筆または刷毛
- ・ドライヤー
- ・光源となる明かり…電球やLED（発光ダイオード）などの照明器具

3. 実践の流れ

(1)牛乳パックに紙紐を巻いていく

- ①牛乳パックにラップを巻いていく。この時、空気が入らないように気をつけながら、ラップを牛乳パックに2周くらい巻いていく（図1）。
- ②牛乳パックのラップを巻いた部分の上に紙紐を巻いていく。紙紐が巻きやすくなるように、紙紐の所々を、少量の木工用ボンドで接着しながら巻いていくとよい（図2）。この時、紙紐が多くの箇所で交差するように巻いていくと、完成した作品の強度がより強くなる。

(2)和紙の飾りを貼っていく・作品を飾る

- ①いろいろな色の和紙を自由な形に切って飾りを作る（図3）。
- ②①の飾りを牛乳パックに巻いた紙紐の上に木工用ボンドで貼っていく（図4、5）。この時、和紙を重ね過ぎると、完成後に明かりを灯した時、和紙のきれいな色が現れないので注意が必要である。



図1. 牛乳パックにラップを巻く。



図2. 木工用ボンドで所々を接着しながら紙紐を巻く。



図3. 和紙を切って飾りを作る。



図4. 飾りをつけた紙紐①



図5. 飾りをつけた紙紐②

(3)作品を仕上げていく

- ①木工用ボンドを水と1：1程度の割合で溶いた薄め液を用意する。この液を、太い筆か刷毛を使って、和紙の飾りを貼った上から紙紐と和紙の飾り全体に塗っていく（図6）。この時、紙紐や和紙の飾りに薄め液が浸み込むように塗っていくことが大切である。
- ②①の作業の後、自然乾燥させるか、ドライヤーなどを使って薄めた木工用ボンドを乾燥させる（図7）。
- ③作品部分が完全に乾燥した後、牛乳パックから作品部分を外す（図8）。この時、作品とラップと一緒に牛乳パックから外すようにし、最後に、作品部分とラップを分けるようにして進めると作品を容易に取り外すことができる。



図6. 木工用ボンドを水で溶いた薄め液を紙紐と和紙の飾り全体に塗る。



図7. ドライヤーで紙紐と和紙の飾りを乾かす。



図8. 作品とラップを一緒に外す。

- ④紙紐と和紙の飾り部分の内部に光源となる明かりを置いてからその明かりを灯すと、作品が完成（図9～11）。



図9. ハート型や星型を配した作品



図10. 亀の形をした大きな飾りが印象的な作品



図11. 全面に和紙を配した作品

4. 実践の振り返り

紙紐と和紙で制作したランプシェードは、明かりを灯した時と灯さない時との違いにも作品としての面白さがある。

5. まとめ

制作する前には、紙紐を用いた立体作品が固くしっかりしたモノになるということが想像しにくいので、和紙を用いずに紙紐だけで立体的なモノを作ってみる経験を一度積んだ後に、本制作に入るとよい。また、和紙の色を効果的できれいに活かすために、和紙だけを明かりに透かしてみるなど、和紙を使った試しを行うことも本作品を作っていく上で大切である。

木工用ボンドを水で溶いた薄め液を使って、紙紐や和紙を固めて立体を制作するというものづくりは、型を牛乳パックではなく風船・ビーチボール・段ボール・紙筒などに変えたり、用いる材料を紙紐や和紙以外に色画用紙・折り紙・千代紙などを加えたりすることによって、いろいろな作品へと発展させることができる。

〔樋口一成〕